九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

周作人新詩の位相 : 1919年を中心に

鳥谷, まゆみ
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/13201

出版情報：中国文学論集. 37, pp.15-28, 2008-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

周作人新詩の位相

── 1919年を中心に ──

鳥　谷　まゆみ

はじめに

詩人としての周作人（1885－1967）は、随筆小品家としてほど知られていない。周作人の新詩創作が、新文学期の比較的短い期間になされたこともあり、彼の新詩についての論考はそう多くはない。また、1919年から始めた新詩の創作から、文学的思想の転向を迎えた1921年までの新詩の詳細を論じた論考は管見の限り殆ど見られない(1)。

銭理群は、周作人の新詩が「詩歌の平民化」の要求を満足させるものとし、その散文化の傾向を指摘している（『周作人伝』1991）。従来の先行研究では、周作人の早期新詩は社会的意義で注目され、＜散文詩＞として一括りに論述される傾向が強い。そこでは、新詩から散文詩を執筆するまでの文学的営為の過程については殆ど論じられていないように思われる。

月刊雑誌『新青年』が、1918年５月から全面白話化され、文学革命は本格的な時代を迎える。1919年を前後して誌上では新詩が陸続的に創作発表され、にわかに新詩運動の様を呈す。『中国新文学大系』（1935）の詩集巻を見れば、1917－27年までの新詩全52篇のうち、1919年は最多の９篇が収録されており、この年が新詩運動の魁の時であったことが窺われる。周作人もこの年に初めて新詩を創作した後、1921年頃まで安定的に新詩を創作した。しかし、1923年に散文詩を書いてからは新詩を殆ど書かなくなった(2)。周作人にとって、新詩とはいかなる意味を持つものであったのだろうか。

本稿では、1919年に書かれた周作人初の新詩「兩個掃雪的人」と、同年の新詩の傑作とされる「小河」などの新詩作品を通して、周作人新詩の実態を追いたい。これによって、周作人新詩の表現様式の模索の過程と、新詩の散文化との関係について明らかになる。この指摘は、彼が1924年頃から小品文を手掛けるようになる一方で、歌謡、民俗学に傾倒するようになるまでの文学的営為の一側面に光を当てるものである(3)。

1．周作人の新詩について

胡適は「談新詩」(1919)[4]で「作詩如作文」と標榜し、近年の新詩運動を「詩體的大解放」とした。そのなかで、周作人の「小河」(1919) を新詩における傑作と評したことは広く知られる。「小河」については、後の文学者たちもほぼ同様の評価をしており、新文化運動のただなかにあって、いかに注目を集めた作品であったかがわかる。では、そのほかの周作人の新詩は、当時の文壇でどのように映っていたのだろうか。

趙景深 (「周作人的詩」1922) は、周作人の詩は日常の平凡なものを味わい深く表現している点で、美しく優れていると評した。その例として、新詩「兩個掃雪的人」、「画家」(1919)、「秋風」(1920) を挙げている。また、王哲甫「周作人的詩」(1933) は、趙が挙げた1919年の一連の詩が、平民を表現したものと指摘している。阿英 (「周作人詩紀」1938) は、前述の「掃雪的人」の二人がひたすらに雪を掃き続ける光景は、社会改造に心血を注ぐ者たちの決意や耐え忍ぶ姿を反映したものと指摘している。以上を要するに、周作人の新詩は、実景を口語で平易に描きつつも、そこに情趣を込めるものであると理解できよう。そして、その実景とはまさに当時の中国社会を反映するものであった。廃名は周作人新詩の影響力が胡適に次ぐものと論じたが、新文学の波が湧き立つなか、周作人の新詩が一定の注目を集めていたことが窺える。

1919年１月、全国的に民衆による反帝・反封建運動、即ち五・四運動が捲き起こり、同時に、知識人らを中心に新文化運動が展開された。新思想を鼓吹するため、この年１月に月刊『新潮』が北京大学を基盤とする新潮社により創刊され、２月には『晨報副刊』が改組、７月には少年中国学会が月刊『少年中国』を創刊している。新文化運動の一翼をなした『新青年』で、評論以外に創作としてこの頃比較的盛んだったのは＜新詩＞で、戯曲や小説についてはその大半が翻訳であった[5]。周作人も1919年には、翻訳と並んで新詩創作を多く手掛けている。

では、周作人は新詩をどれくらい書いたのだろうか。『周作人研究資料』(1986)[6]によれば、周作人が創作した新詩の数は全体で47篇である (翻訳詩を除く)。周作人は1919年から新詩を書き始め、1923年以後は新詩を殆ど書かず、さらに三十年代からは＜打油詩＞と称する旧詩を書くようになる[7]。このように周作人の新詩は三十年代までにその殆どが書かれている[8]。参考までに1936年に魯迅が没するまでの詩の数を挙げると新詩約30篇 (旧詩約50

篇)[9]であるので、これと比すれば周作人は同時期に魯迅とほぼ同分量の新詩を書いたことになる[10]。1919年の新文化運動、そして新詩と周作人との浅からぬ関わりの一端を窺うことができるように思う。

ところで、1919年前後の五・四文壇について再び述べると、時代の文脈に沿うかたちで「車夫」をモチーフに創作された文学作品が多く出現している。沈尹默「人力車夫」(1918)、胡適「人力車夫」(1918)、劉半農「車毯」(1918) などの新詩がそうである。これは当時、労働を神聖化する風潮があり (蔡元培「労工神聖」1918『新青年』第５巻５号等)、車夫は労働者を象徴する存在であったことと関係がある。二十年代に入っても、周恩来「死人的享福」、葉聖陶「人力車夫」(1920) など車夫をモチーフとする文学作品が発表されており、それらの文学作品を階級論ないしは、思想革命の視点から分析した論考が存在する[11]。

周作人もこの時期、「人的文學」[12]、「平民文學」[13] (1918) を書くなど、人道主義的立場から人間について深慮しており、車夫をモチーフとした労働者に関する詩も数篇書いている。周作人の初の新詩「兩個掃雪的人」にも車夫や労働者を想起させる箇所が見られる。しかし、従来それらの作品については、階級論の視点から作品タイトルに言及される程度であり、作品そのものへの注目というのは殆ど見られない。そこで、次節では「兩個掃雪的人」を取りあげ、解釈を試みようと思う。

２.「兩個掃雪的人」── 周作人初の新詩作品

周作人の初の新詩「兩個掃雪的人」(以下「掃雪的人」と省略) は1919年３月15日『新青年』第６巻３号に発表された。同詩は、共同新詩集『雪朝』(1922、文学研究会叢書) や、周作人の初の新詩集で1929年に出版された『過去的生命』にも収録された。両詩集の共に第一篇目を飾るなど、新文化運動の当時にあって、注目を集めた詩である[14]。

陰沉沉的天氣,
香粉一般白雲[15]、下的漫天遍地。
　天安門外白芒芒的馬路上全没有車馬蹤跡,
　只有兩個人在那里掃雪。
一面儘掃，一面儘下：
掃浄了東邊，又下滿了西邊；
掃開了高地，又塡平了窪地。
　粗麻布的外套上，已經積了一層雪,

　他們兩人還只是掃個不歇。
雪愈下愈大了；
　上下左右，都是滾滾的香粉一般白雪。
在這中間，彷彿白浪中浮着兩個螞蟻，
　他們兩人還只是掃個不歇。
　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊
　祝福你掃雪的人！
　我從**清**早起，在雪地裏行走，不得不謝謝你。
　　八年一月十三日　周作人

どんよりと曇った天気、
白粉のような白雪が降って、空やあたり一面すべてを覆っている。
　天安門外は見渡すかぎり真っ白で路上には馬車の轍一つ無い、
　二人の人だけがそこで雪を掃いている。
一方ではただただ掃きながら、他方ではただただ降りつづける：
東の方をきれいに掃いたら、また西の方は雪でいっぱいになり、
高くなったところを掃いて、また窪んだところを埋めて平らにする。
　粗い麻布のコートの上には、すでに雪が薄ら降り積もってしまった、
　彼ら二人はやはり休みもせずに一心不乱に掃き続ける
雪はますます強く降り；
　上下左右、どこもすべて白粉のような雪が押し寄せている。
このただなかにあってあたかも白波の中に二匹の蟻が浮かんでいるようで、
　彼ら二人はやはり休みもせずに一心不乱に掃き続ける
　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊
雪を掃くあなた方に幸ありますように！
　私は朝から、雪の積もった中をゆくとき、あなた方に感謝せざるを得ない。

この詩は実景を描いたものと思われる。『日記』によれば、詩が作られた1919年１月13日、北京で雪が降ったと記されている。また、詩の一節にある「天安門外」は、当時周兄弟が住んだ紹興会館から北京大学までの通勤路上に実在することなどが証左として挙げられる(16)。北方特有の水分を含まないサラサラした「白粉のような雪」が舞う朝、人力車に揺られる周作人の眼に映った麻布のコートをまとい、ひたすら雪掃きをする二人の姿。旧皇帝が住む紫禁城の天安門を背景とすることで、より一層際立って見えたのだろうか。そもそも掃除夫二人とは、元の清王朝の門番を象徴した可能性もある(17)。大学に勤務する知識人周作人にとって、車上の高い位置から、単純な反復作業をする彼らの姿を見かけた際の同情にも似た感慨を詠んだのかもしれない。

いずれも比較的冷静に光景を傍観する周作人の姿というものが窺えるだろう。

銭理群は、「掃雪的人」が1919年に創作された一連の新詩と並んで五・四時期の「社会改造、詩歌の平民化」の精神を反映した新詩であると指摘している（1991）。形式上の特徴について言えば、旧詩の域を完全に抜け出せていない点もあるが口語自由詩と言えるだろう。詩中には、感嘆符・星模様の使用や「祝福」と西洋キリスト文化を想起させる語句が見られ、これらは周作人が新文学を意識して創作したことを示していると考えられる。

注意したいのは、周作人が口語詩としての文体や、写実的描写に拘ったのではないということである。むしろ、詩本来が持つ文学的雰囲気を尊重することが周作人にとって肝要だったのではないだろうか。「どこもすべて白粉のような雪が押し寄せている」、「このただなかにあってあたかも白波の中に二匹の蟻が浮かんでいるよう」と、二人の労働の姿を写実的に描き賛美する姿勢をとりながらも、白波に漂うことしかできない無力な「蟻」の姿に喩える詩的情趣に、貴族的な気配を醸す周作人の姿を垣間見ることができる。

周作人が自身の旧詩の教養によって「掃雪的人」を書いたことは疑を容れない。「掃雪的人」は、完成度が高い詩とは言い難いかもしれないが、周作人にとって、初の新詩という記念碑的な意義だけではなく、新詩の黎明期において、同詩の独自性が文壇に少なからぬ影響を与えたことは想像に難くない。こうした点で、詩史的な意義を有する作品として着目できよう。

３．周作人新詩にみる表現様式の変容 ── 散文的詩から散文詩まで

３.１　「小河」(1919)

周作人の「小河」は、1919年２月、銭玄同が編集を担当した『新青年』第６巻２号に発表された（1919年１月24日作）。紙面５頁にもわたる長編の詩である。「小河」は、自然の摂理を象徴する一本の小さい川を中心に、その周辺に生える稲や桑の木、小動物などが、会話の形でそれぞれの将来を憂慮する胸中を語る話である。詩というよりも、散文や寓意小説を想起させる「小河」に見える叙情的な自然の光景は、実景ではない。周作人はのちの1944年に、水郷（紹興）出身ゆえ水に強い愛着があり、「小河」の題材もここから出たと述懐している（「苦茶庵打油詩」）。そもそも、「小河」は、これまで指摘されたように、周作人の人道主義、理想主義に基づく「新しき村」受容から生まれたものであった[18]。

「小河」は、胡適が新詩の傑作として評価して以来、注目され続けた作品として知られる。「小河」に関連する論考も数多く、東京留学経験より始ま

る周作人の白樺派の新しき村及び、ウィリアム・ブレイク受容と、人道主義受容との関わりから「小河」を検討した論考が既にいくつか存在する[19]。しかしながら、「小河」は、初の新詩「掃雪的人」から僅か11日後に書かれ、周作人をして新詩の在り方を模索した作品として重要と考えられるので、本節では「小河」を文体の視点から捉え直してみようと思う。

「小河」が『新青年』に発表された1919年初頭、新詩には旧詩の影が見え隠れしていた。そうしたなか、自由な口語のリズムを持つ「小河」は、自由な文体として文壇に新鮮な空気を齎したようだ[20]。廃名は、周作人の新詩について次のように述懐している。「ほかの人の新詩は旧詩から生まれ出たものと言え、周先生の詩ではじめて話言葉の自然さに合ったといえる」。さらに、廃名は、周作人の文体が欧化の道を進んだことを指摘している[21]。傑作とされた「小河」の所以とはいかなるものであったのだろうか。周作人は『新青年』誌上に「小河」を掲載した際、その冒頭の序文で次のように記している。

> 有人問我這詩是什麼體、連自己也回答不出。法國波特來爾提倡起來的散文詩、略略相像、不過他是用散文格式、現在却一行一行分寫了。内容大致仿那欧洲的俗歌；俗歌本來最要叶韻、現在却無韻。或者算不得詩、也未可知；但這是沒有什麼關係。(人は私にこの詩はなんという文体かと問うが、私自身でさえも答えられない。フランスのボードレールが提唱した散文詩、これと大体似ているだろう。しかし彼は散文形式を用いたが、今私は一行一行分けて書いた。内容はおおよそヨーロッパの俗謡を手本にした。俗謡は本来押韻を必要とするが、この詩は無韻である。詩とはいえないかもしれないが、しかしそれはあまり関係がない。)[22]

上の序文では、「小河」を散文的手法で書いたことについては消極的に評言する一方で、58行もの改行と無韻を強調している[23]。のちに周作人は「小河」について、当時を振り返り次のように述懐している。「当時としては一風変わっていると思われて、たいへん注目された。形式についても詩・詞・歌・賦の規則からは脱却しており、完全な口語の散文で書いた」[24]とある。数十年の時を経てから、「小河」が散文的に書かれたことを認めたのである。引用文末に「しかしそれはあまり関係がない」とあるように、周作人は「小河」を書いた際、文体面に重点を置くというよりも、より自由な表現様式を求めることを意識したと考えられる。

日本留学時代から周作人はボードレールの作品に親しんでいた。周作人は、ボードレールの散文詩にみる、純化された表現様式に魅せられたことだろう。周作人の意識に留学中の経験が作用して、「小河」を書いたことは十分に考

えられる。上の序文に見られるように、ボードレールの散文詩やヨーロッパの俗謡を念頭に置きながらも、詩を散文と明確に区別しようとする周作人の姿勢は、新詩の詩的可能性を模索する姿にほかならない。この時点で周作人が散文詩を具体的にどう定義付けたかを論じることは困難だが、少なくとも散文的な詩である「小河」の執筆を契機に、周作人は新たな表現様式を見出したと言えないだろうか。既存の新詩とは異なる、一種純化された「小河」の表現様式は、読者を限定しない点で新詩の規範と為り得たのである。

３.２　新詩と散文詩

「小河」以後、周作人は同詩のような長文で散文的な新詩を書いていない[25]。そして、1923年の「花」[26]を最後に周作人は新詩を書かなくなった。その理由として、二十年代に入り、五・四運動が陰りを見せ始めたこと以外に、1920年秋に病に倒れたことに起因する、文学的転向（1920－21）や、周作人の外国文学受容などが考えられる。

ところで1919年以後、文壇での新詩の創作状況はどうだったのだろうか。1921年１月に、北京大学関係者らが中心となって文学研究会（「世界文学を紹介し、中国の旧文学を整理し、新文学を創造することを趣旨」発会・第二条）が結成された。さらに、文学研究会員によって結成された中国新詩社が、1922年に初の新詩雑誌『詩』（1922.1.15－1923.5.15）を創刊し、同誌は創作新詩を中心に全号で約400首もの新詩を収録している。この頃、新詩はこの1922年から23年頃にひとつの安定期を迎える。

要するに新詩は、1919年以後も文壇では継続的に創作されたわけだが、周作人について言えば、創作状況に変化が現れたのは前述の通りである。周作人は、『詩』に日本の童謡や俗歌、小詩、フランスの諧謔詩などを訳載したものの、自身の新詩作品を発表することはなかった。

周作人の新文学に対する意識の変化は、1920年１月６日の「新文学的要求」と題する講演内容から窺える[27]。芸術を論じるのに、先ず芸術派と人生派を挙げて、次に人生派が文芸を倫理の道具として功利的方向に向かい易い点を批判する[28]。その上で、「人道主義的文学」に基調を求め、芸術の方法で以って個人の感情を表すべきと説いた。五・四時期初め、新文学に期待されていたのは、文筆家個人の文学創作よりも読者を啓蒙し社会変革を齎す作用であって、文学を社会的レベルで捉える傾向があった。この時期周作人は、文学を個人レベルで捉ることを明確に打ち出すようになってくる。

周作人は「新詩」（1921）のなかで、同時期の新詩の状況について次のように記している。

現在的新詩壇、真可以説消沈極了。幾個老詩人不知怎的都像晩秋的蝉一様、不大作声、而且叫時声音也很微弱、彷彿在表明盛時過去、藝術生活的弾丸、已経向着老衰之坂了。(現在の新詩壇は、実に消沈極まりないと言える。数人の老詩人がなぜか皆まるで晩秋の蝉のように、あまり鳴かずに、また鳴く時の声もひどく弱々しい。あたかも盛時が過ぎ去ったことを表しているようで、藝術生活の弾丸は、既に年老い衰えの坂へと向かった。)[29]

上の評言からは、新詩運動に対する周作人の不満と寂寥感が読み取れるように思う。言うなれば、それは新詩の本質に対するものであったかもしれない。同じ文章のなかで、周作人は「新詩の本当の長所」を未だ嘗て完全に示した者はおらず、それゆえその基礎も非常に不安定だと語っている[30]。では、周作人は「新詩の本当の長所」をこの時期、具体的にどのように考えていたのだろうか。

1921年の「新詩」発表の前日に「美文」という評論を発表した。そのなかで周作人は、外国文学のなかの論文を一、学術的、二、芸術的の二つに分類し、後者はまた「美文」と称されるとして、「美文」がイギリス国民において最も発達していると説明する。論文について、論じた箇所があるので、次に引用してみよう。

読好的論文、如読散文詩、因為他実在是詩与散文中間的橋。中国古文裏的序、記与説等、也可以説是美文的一類。(良い議論文を読むということは、たとえば散文詩を読むようなもので、散文詩は確かに詩と散文の間を繋ぐ橋なのである。中国古文のなかのはしがき、紀事や論説なども、美文の一種と言える。)[31]

周作人は、散文詩を「詩と散文の間を繋ぐ橋」として論文と同意義で捉えている。周作人の評言にあるように、「美文」が論文の一つであることを鑑みれば、周作人にとって「新詩の本当の長所」とは、自由な文体としての新詩、即ち散文詩を指す。このように、周作人が新詩と散文詩について、独自の枠組みを提示した点、そして、外国文学だけではなく、中国古文の「はしがき、紀事や論説」などの双方に「美文」が存在すると論じている点は注目できる。

1921年末頃から、にわかに散文詩運動が起こり、散文詩について様々に議論されるようになる[32]。周作人も「三個文学家的紀念」(1921.11.14『晨報副刊』)を記して、外国文学にみる自然主義や人道主義、象徴主義の文学思潮を評価した上で、ボードレールの散文詩などをこの時期、集中的に翻訳紹介した。一方、周作人は次第に懐古趣味の色合いを強め、新文学の象徴とも

言える新詩の詩的可能性を、外国文学だけでなく、中国古文の中に見出したのである。

個人の発見と人道主義の思想は、知識人たちをして次第に社会の現実を認識させるようになる。こうして思想表現や人生の考察というものを深慮してゆくが、この意識の拡がりと共に表現様式を変容させてゆくことになる。周作人について言えば、「小河」執筆を契機に、さらに自由な表現様式を求めて散文詩への文学的興味を強めてゆき、1923年夏には、散文詩「尋路的人 ── 贈徐玉諾君」(1923.8.1『晨報副刊』) を書くに至る。

おわりに

以上、1919年の周作人新詩の誕生から、23年に散文詩を書くようになるまでの周作人の文学的営為の過程が、新詩への詩的可能性の模索の過程であったことを論じた。周作人は、文学芸術を深慮するなかで新詩に芸術的余韻を求め、次第に散文詩へと傾斜してゆくのである。

周作人にとっての新詩とは、新文学の実践を可能とし得る文体であったが、それ以上に、文学芸術を模索するための最初の創作舞台であったと言える。新文学の旗手として1919年に「兩個掃雪的人」を書くも、散文的な新詩と言える「小河」を先に発表したのは、編集担当の銭玄同の計らいもあろうが、芸術での感情表現を目指した周作人の意図的なものと考えられる。

周作人は、1923年に散文詩「尋路的人」を記したのち、1924年頃からより自由な感情表現を可能とする小品文を書き始める。結果的に、周作人の意識の拡がりは、彼をして狭義の意味の詩人としてではなく、古典的意味合いとより近い文人として新たな表現様式を選択させたのである。

注

(1) 周の詩全般について、日本における先駆的研究に松岡俊裕論文 (「周作人詩話一」第21、「二」第24、「三」第26、「四」第31、「五」第33号『人文科学論集』信州大学人文学部1987～1999年) が挙げられるだろう。1897年から1936年までの周作人の詩 (「旧詩」30篇、「新詩」３篇) に訳を施し、伝記的事実に即して論述してあるが、1919から26年の新詩作品は取り上げられていない。そのほか、新詩について次のような論文が挙げられる。于耀明「生田春月の『新しき詩の作り方』と中国の初期口語詩」(『周作人と日本近代文学』翰林書房、2001年)、森雅子「新詩の開拓者としての周作人」

(『颱風』 第36号颱風の会、2002年９月)。

(２) 1920－21年、周作人は病を契機に文学的転向を迎える。銭理群（『周作人伝』、上海人民出版社、1991年）は、周の創作活動と思想転換の時期が1921年９月であることを指摘している。根岸宗一郎（『周作人とギリシャ文学』東京大学博士論文、2003年）は、翻訳活動の変化から銭論を裏付ける作業をおこなった。

(３) 周作人の新詩が散文化を遂げる一方で、歌謡にも傾斜してゆく。歌謡収集は上京前、紹興時代から行っていたが、1920年、顧頡剛、周作人らが中心となって「歌謡研究会」を設立。1922年週刊『歌謡』を創刊させ、周作人は本格的に民俗学研究へと取り組むようになる。

(４) 胡適「談新詩」(1919年10月10日『星期評論』５号「双十節紀念専号」)。

(５) 小野忍『中国の現代文学』(東京大学出版社、1972年）参照。

(６) 張菊香・張鉄栄編『周作人研究資料』(天津人民出版社、1986年)。ほかに、『周作人日記』(大象出版社、1996年）を参照した。末尾に「周作人前期新詩目録　稿」を附しているので適宜ご参照頂きたい。

(７) 周は、四十年代に南京老虎橋の獄中で旧詩を作った際、1919年に最も多く新詩を作り、二十年代初頭に西山での病気治療を余儀なくされたことを境に新詩を書かなくなったと回想している。(「老虎橋雑詩題記」1947年７月20日作)。

(８) 三十年代以後周は旧詩を書いた。末尾「周作人前期新詩目録　稿」参照。旧詩（打油詩）に関する論考に、小川利康「周作人『老橋虎雑詩』試論(上）――「雑詩」という形式をめぐって」『文化論集』第21号（早稲田大學、2002年９月)、著書に、呉紅華『周作人と江戸庶民文芸』(創土社、2005年)がある。

(９) 魯迅の散文詩『野草』のなかの作品を旧詩とするか新詩とするかについては諸説あるが、参考までに飯倉照平「『野草』解説」(『魯迅全集』第三巻、学習研究社、1985年）の一節を挙げておこうと思う。「散文詩という呼び方については、作者が「『自選集』自序」で、『野草』に収めた短文は「いくらか誇張していえば散文詩」とみずから規定している」、「厳密に言えば『野草』は、白話詩一篇、戯曲一篇、短文二十一篇から成るというべきであろう」。

(10) 周の新詩以外の文筆活動の一端として、同じく魯迅が没する1936年まで、『周作人研究資料』を基に文章の数を数えてみると、おおよそ次のようになる。雑文約420篇、随筆約200篇、小説の翻訳約80篇、小説以外の翻訳約100篇、評論約90篇等。特に二十年代以後は小品文約100篇を書いており、小品

随筆家として名を成した周の輪郭の一端が窺える。

(11)　大山正春「魯迅「一件小事」に就いて」(『明治学院論叢』第45号、明治学院大学、1957年)、岩佐昌暲「中国文学における人力車夫」(『文明のクロスロード. Museum Kyushu』第57号、博物館等建設推進九州会議、1997年)等。

(12)　周作人「人的文學」1918年２月15日『新青年』第５巻６号。

(13)　周作人「平民的文學」1918年２月20日『毎周評論』第５期。

(14)　そのほか、北社編『新詩年選集』(上海亜東図書館、1922年)、湘郷成・希菊編『近代名人白話文選』(平化合作社、1930年）などに所収。

(15)　原文は雲。のちに文集を編んだ際に雪に修正されている。明らかに誤植と考えられるが、本稿では原文の通り雲と記し、雪の意味で訳出した。

(16)　1917年から紹興会館に住み始めた周は、北京大学（現在の故宮北東に位置した）までの通勤路として二つのルートがあり、そのうち一つは天安門前を通る長安街路を通った（「往来的路」『知堂回想録』)。周の文章・作品などによれば、通勤には主に人力車を利用していたようだ。当日の日記には次のように記してある。「十三日雨雪上午往校得中西屋十一月廿四日寄小包内生物学講和等五冊購新潮一本至新書年稿下午三時返寄家信」。

(17)　周作人「所見」(1920年10月24日『晨報副刊』）にも紫禁城東北角に位置する三座門付近の労働者らしき「二人」の姿が書かれている。呉延燮編『北京市志稿民政志』(北京燕山出版社、1998年）参照。

(18)　飯塚朗「周作人・小河・新村」(『東西学術研究所紀要』第８号、関西大学東西学術研究所、1975年）参照。

(19)　「新しき村」に関する周の文章は次のとおり。「日本的新村」(1919年３月『新青年』第６巻３号)、「新村訪問記」(1919年７月30日『新潮』第２巻１号)、「新村的精神」(1919年１月８日『新青年』第７巻２号)、「新村的理想与実際」(1920年６月23、24日『晨報副刊』）等。主な先行研究としては、劉皓明著、李春訳「従‘小野蛮’到‘神人合一’－1920年前後周作人的浪漫主義沖動」(『新詩評論』第1輯、北京大学出版社、2008年。※初出原文『Asia Major』2002年）小川利康「五四時期の周作人の文学観 ── W・ブレイク、L・トルストイの受容を中心に」(『日本中国学会報』第42集、1990年)、于耀明「周作人と新しき村 ── 武者小路実篤との邂逅」(『武庫川女子大学大学院かほよとり』第４号、1996年)、尾崎文昭「周作人の新村提唱とその波紋（上）── 五四退潮期の文学状況（一)」(『明治大学教養論集』第207号1988年（下）同第237号1991年）がある。

(20)　葉聖陶（「小河」1936年５月10日『新少年』１巻９期）は、「小河」が作

品全体としてわかり易い点と「言葉・声調の調子と情景の調和がよくとれている」とし、周作人が作品のなかで作者の感情を説明し過ぎず、読者自身に作品中の情景を考えさせる点が良いと評した。

(21)　廃名「『小河』及其他」(『談新詩』北平新民印書館、1944年)。孫郁、黄喬生『回望周作人・其文其書』(河南大学出版社、2004年）参照。

(22)　周作人「小河・序」(1919年２月『新青年』第６巻２号)。

(23)　周は、『新青年』に計「五七行」の「小河」を掲載した述懐している。しかし、数えてみると58行である。(「小河与新村・中」『知堂回想録』、香港三育図書文具公司、1974年)。河北教育出版社、2002年参照。

(24)　周作人「小河与新村・中」(前掲)。

(25)　「我写“新诗”，是从民国七年才开始的。所以经验很浅，写那样的长篇实在还是第一次，而且也就是第末次了，因为我写的稍微长的诗实在只有一篇。」(周作人「小河与新村　上」『知堂回想録』)。

(26)　周作人「花」(1923年１月３日『晨報副刊』)。『過去的生命』所収。

(27)　周作人「新文学的要求」1920年１月６日北京少年学会講演。(1920年１月８日『晨報副刊』)。

(28)　1923年周は「詩的効用」を記し、兪平伯（「詩底進化的還原論」1922年『詩』第1号）の詩が民衆を啓蒙するという実用主義的な定義に対して、「詩の創造とは一種無意識の衝動によるもの」として反論する。周は文芸においては、著者が個人の感情を表現し得れば、それが効用であると主張した。

(29)　周作人「新詩」(1921年６月９日『晨報副刊』)。『談虎集』所収。

(30)　原文はつぎの通り。「语体诗的真正长处，还不曾有人将他完全的表示出来，因此根基并不十分稳固。」

(31)　周作人「美文」(1921年６月８日『晨報副刊』)。『談虎集』所収。

(32)　散文詩に関する評論は、早くは1921年２月21日「論散文詩」(『文学旬刊』第23期）に見え、既に注目されていたことを窺える。同誌の第27期では、滕固（「論散文詩」、1922年２月１日『文学旬刊』第27期）が散文詩の本質や定義を論述して、「小河」を散文詩と認めようと記した箇所が見られる。

※本稿は、第237回中国文藝座談会（九州大学中国文学会、2008年９月13日）において、口頭発表したものに加筆修正を加えて論文に成したものである。

附）周作人新詩（1919〜20年代）目録　稿

＊目録は、張菊香・張鉄栄『周作人研究資料』(天津人民出版社、1986年）を参照して鳥谷が作成した。なお、原則的に翻訳詩は除いたが、初出原誌で詩欄に掲

載されているもの、また、『資料』に「詩」と記されているものについては、※を附し特にここでは記した。30年代から再び書き始める（旧）詩について、参考までに、末尾にその概数のみを附した。＊『過去的生命』（以下、『生命』と省略）は、1929年に出版された周作人の初の新詩集。

1919	兩個掃雪的人	1919.1.13作、1919.3.15『新青年』第６巻３号。『生命』所収
	小河	1919.1.21作、1919.2.15『新青年』第６巻２号。『生命』所収
	微明	19191.23作、1919.3.15『新青年』第６巻３号。
	路上所見	1919.1.31作、1919.3.15『新青年』第６巻３号。
	北風	1919.2.18作、1919.3.15『新青年』第６巻３号。
	背槍的人	1919.3.7作、1919.3.16『每週評論』第13期。『生命』所収
	京奉車中	1919.4.13『每週評論』第17期。
	偶成	1919.6.3作、1919.6.8『每週評論』第25期。
	画家	1919.9.21作、1919.11.1『新青年』第６巻６号。『生命』所収
	東京炮兵工廠同盟罷工	1919.8-9作、1919.11.1『新青年』第６巻６号。
	愛与憎	1919.10.1作、1920.1.1『新青年』第７巻２号。『生命』所収
1920	荊棘	1920.2.7作、1920.2.15『新生活』第26期。『生命』所収
	秋風	1920.11.4作、1920.11.7『晨報副刊』。『生命』所収
	労働的歌六首	1920.12.26『批評』第５号「新村号」。
	苦人	1920.2.8『新生活』第25期。
	愚人的心算	1920.6.20作、1920.6.27『晨報副刊』。
	酔漢的歌	1920.10.8作、1920.10.13『晨報副刊』。
	所見	1920.10.20作、1920.10.24『晨報副刊』。『生命』所収
	児歌、慈姑的盆	1920.10.21,22作、1920.10.26『晨報副刊』。『生命』所収
	雑訳詩二十三首	1920.11.1『新青年』第８巻３号。※
	秋風	1920.11.4作、1920.11.7『晨報副刊』。『生命』所収
	労働的歌六首	1920.12.26『批評』第５号「新村号」。
1921	夢想者的悲哀	1921.3.7『晨報副刊』。『生命』所収。
	過去的生命	1921.4.4作、1921.4.17『晨報副刊』。『生命』所収
	中国人的悲哀	1921.4.6作、19214.17『晨報副刊』。『生命』所収
	岐路	1921.4.16作、1921.12.16『時事新報』学灯。『生命』所収
	病中的詩	1921.5.3『晨報副刊』。
	蒼蠅	1921.5.12『晨報副刊』。『生命』所収
	小孩	1921.5.12『晨報副刊』。『生命』所収
	小孩（一、二）	1921.5.17『晨報副刊』。『生命』所収
	山居雑詩	1921.6.13『晨報副刊』。
	山居雑詩	1921.6.17–21作、1921.6.25『晨報副刊』。
	山居雑詩	1921.6.25–8.10、1921.9.1『新青年』第９巻５号。『生命』所収
	雑訳日本詩三十首	1921.8『新青年』第９巻4号。※
	病中的詩	1921.3.2–8.28作、1921.9.1『新青年』第９巻５号。『生命』所収

	西山小品（一個鄉民的死、賣汽水的少年）	1921.8.30作、1922.2.10『小説月報』第13巻２号。『生命』所収※原誌では詩欄に掲載。『資料』には、「小品」と表記
	日本俗歌四十首	1921.12.24訳、1922.2.15『詩』第１巻２号。※
1922	小孩	1922.1.18作、1922.1.27『晨報副刊』。『生命』所収
	她們	1922.1.18作、1922.4.9『晨報副刊』。『生命』所収
	日本俗歌二十首	1922.9.17『努力週報』第20期。※
1923	晝夢	1923.1.3作、1923.1.15『晨報副刊』。『生命』所収
	仁慈的小野蛮	1923.1.15『晨報副刊』。
	飲酒	1923.3.12作、1923.3.17『晨報副刊』。
	高楼、她們	1923.4.5作、1923.4.9『晨報副刊』。『生命』所収※原誌では詩欄に掲載。『資料』には、「新詩」と表記
	尋路的人－徐玉諾君	1923.7.30作、1923.8.1『晨報副刊』。『生命』所収※原誌には分類表記無。『資料』には「散文詩」と表記
	花	1923.10.26作、1923.11.3『晨報副刊』。『生命』所収
1927	閑話拾遺二五、詩一首	1927.4.30『語絲』第129期。※原誌には詩欄等の表記無。原文中に旧詩（打油詩）掲載
	閑話拾遺二六、詩兩首	1927.4.30『語絲』第129期。※原誌には詩欄等の表記無。原文中に旧詩掲載

＊旧詩：30年代　3篇、40年代　2篇、50年代　72篇、60年代　0篇。